

## Bangladesh南部避難民支援事業

薬剤師 仲里泰太郎

2017年9月中旬から続くこの医療支援活動を引き継いで、2017年11月24日から第3班の薬剤師として、また後続班の薬剤師への引き継ぎのために第4班の前半まで派遣期間を延長し、約2ヶ月にわたって活動をしてきました。第1班、第2班の活動の大きな成果として、既に我々が業務に着いた頃には巡回診療としての活動地が確立されており、更に現地ボランティアスタッフや Bangladesh赤新月社（以下、バ赤）スタッフとの協働体制も作り上げられていました。私が前任の薬剤師から初日に聞いた第3班の最初の大きなミッションの一つは、既に建設段階に入っていた仮設診療所における薬局の確立という事でした。私の到着から仮設診療所の立ち上げまで2週間程度あったので、まずは第1班、第2班から使用されていた医薬品、医療機器の大整理をする事から始めました。第3班の強みは薬剤師が1人から2人に増員されていた事でした。私も含めて2人共初派遣でしたが、種々の研修の頃からずっと知っている友人だったため、すぐに意思疎通が図れて、スムーズに行動に移す事ができました。在庫、および在庫管理の方法も大幅に変更すると共に、在庫薬品の把握にも努めました。今回の事業では現地 Bangladeshの製薬会社から直接医薬品を購入する事が可能となっていました。購入金額を抑える為に診療に必須の医薬品の絞り込みや、薬剤の効果を保ったまま使用量を抑える工夫も行いました。マスク等の医療消耗品、あるいは新たに必要となった医療機材（小児用聴診器や妊婦用ドップラー）については、最寄りの地元マーケット



仮設診療所

トで購入可能な店を探して調達しました。避難民キャンプでの薬局業務については、第1班、第2班を通して調剤がスムーズにできるよう約束処方が取決められていました。これはフィールドホスピタルを展開していたノルウェー赤十字社の薬剤スタッフからも素晴らしい方法だと非常に感心されました。ただ第3班の頃

になると在庫医薬品がかなり少なくなっていたので、定期内服とされていた解熱鎮痛剤を頓服とする等、その一部を改訂し、使用薬品量を減少させるようにしました。巡回

診療での日々の薬局業務と宿泊地での在庫管理を始めとした様々な業務を行いながら、仮設診療所開設準備を行っていました。

ところが、仮設診療所オープン直前に避難民キャンプでジフテリアのアウトブレイクが発生しました。これにより今までの業務に加えて新たにジフテリアへの対応が必要となりました。医療チームに対して、和歌山医療センターの感染症内科医師古宮先生からアドバイスを頂き、在庫医薬品の中からジフテリアの治療に適応のある内服薬/注射薬を選び、年齢に応じた投与量の設定を行いました。また、ジフテリア疑いの患者に加えてその接触者（主に家族、1家族の構成員は主に10人前後）にも予防薬を投与する必要があった為、大量の予防薬準備も行いました。12月中旬には成田赤十字病院から新たに経験豊富な薬剤師も加わり、薬剤師は3人となりました。ジフテリア患者の治療に先立ってバ赤スタッフ、現地ボランティアスタッフの感染防御の為にジフテリアワクチン接種を行うこととなり、これに使用する大量のワクチンの冷所管理（暑い避難民キャンプでの投与直前まで）も行いました。12月中旬過ぎからは仮設診療所をジフテリアオレンジベッド（ジフテリア抗毒素は使用しないが、経口抗生剤を投与して48時間入院にて経過観察を行う施設）として使用する可能性が高くなりました。それを受けてまず、入院治療時に必要となる輸液を調達する必要性が出てきました。我々の宿泊地には、それまで必要性が低かった輸液はほとんど在庫として置いておらず、宿泊地から4、5時間車で移動した先にある大規模な倉庫に残してありました。これをもう一人の初派遣の薬剤師が1泊2日で取りに行ってきました。私は一方で、入院施設とする為に必要な十分量のベッド、治療に必要なジフテリアに適応のある抗生剤、緊急時に使用できる薬剤等を調達するべく動いていました。これらの薬品、資機材をWHOが寄付してくれるという情報が得られ、WHOの担当者と共に倉庫に行きました。予めチームでリストアップしていた物資に加えて、今後必要になる可能性のある薬品も請求し、寄付してもらいました。その後、それら物資を国際赤十字連盟のトラックに載せて仮設診療所まで運び、ベッド等をセッティング、医薬品を適切な環境下で保管しました。但し、最終的には種々の事情によりジフテリアオレンジベッドとしてはオープンしない方針となりました。

ジフテリアへの対応と並行して、現地ボランティアスタッフへ薬局業務に対する教育も行いました。今後日赤が撤退した後も、バ赤と協働して難民キャンプでの診療活動を継続するためです。口頭で説明するよりやって見せた方が良いだろうと思い、数週間は調剤から薬剤説明まで全て私がやっていましたが、彼らも通訳することによって基本的な調剤や薬剤説明、また日赤の診療所としての考え方（薬をばらまくのではなく、診察から薬剤の適正使用までしっかり行う）ことを早く理解してくれたので、1月に入っ



**薬剤説明をする現地ボランティアスタッフ**

からはほぼ全てを彼らだけで行えるようになっていました。逆に私が彼らに言葉を教えてもらって説明する、というようなことも行うようになりました。1月の初旬から4班に交代となり、私は4班の薬剤師を中心に引き継ぎ等を2週間に渡って行い、特に薬剤業務が円滑に流れるように努めました。

現在 100 万人の避難民がキャンプで厳しい生活を送っています。今後も日赤職員として彼らの支援に関わっていきたいと思います。